

戦国の名城（国指定史跡）

滝山城跡



滝山城主 北条氏照



「滝山城」は、大永元年（西暦1521年）に武蔵・守護代の大石定重が築城し、後に大石氏の養子になった小田原北条氏・四代氏政の弟の氏照が拡張・改修したとされてきました。しかし、近年の研究により、北条氏照は由井領を支配していた大石綱周の養子になり、「浄福寺城（由井城）」（八王子市下恩方町）に居住し、その後、永禄10年（1567年）までに滝山城を築城して移転したと考えられてきています。

滝山城が築かれた加住丘陵は東西に長く、北は多摩川に浸食された急峻な断崖、南は谷戸が入り組んだ複雑な地形になっています。こうした地形を利用した滝山城の特徴は、「二の丸の集中防御」です。「二の丸」は3つの尾根が集中していて、各々に「馬出（出入口）」を設け、「二の丸には敵を絶対入れさせない」という堅固な構えになっています。永禄12年（1569年）10月2日に甲斐の武田信玄が上野から武蔵に侵入して滝山城を攻撃した際に、城下に火をつけて「二の丸」まで攻め込んだと伝えられています。しかし氏照が、当時同盟関係であった上杉謙信の重臣に出した手紙によると、城下に兵を出して戦ったとあります。

その後、氏照は甲斐を重視して八王子城の築城に取り掛かり、天正15年（1587年）ころまでに、移って行ったと考えられています。